

〔書評と紹介〕

原 實

前回に引き続いて近年外国で出版され、筆者の許に送られて来た研究書の中から、主要と思われるものを以下に紹介する。前回同様この機会を与えられた立正大学教授久留宮円秀博士に深甚なる謝意を表す。今回は *Kleine Schriften* の類として K. R. Norman, L. A. Schwarzschild (Hercus), M. B. Emeneau のもの三篇、記念論集として Ch. Vaudeville 女史のもの、論文集として Mantra 及び叙事詩の『道徳的相剋』(Moral Dilemmas) の二篇を紹介する。前回に比し、論述が部分的にやや詳細となったのを遺憾とする。

(1) *Collected Papers*, Volume II and Volume III, K. R. Norman, published by the Pali Text Society, Oxford 1991 and 1992.

前巻に引き続き、Pali, Prakrit 研究に大きな貢献を為し、昨年7月ケンブリッジ大学を退官した K. R. Norman の論文が纏められて単行本の形で出版された。その第二巻は1977年より1983年の間に発表された論文22篇(31-52)、第三巻は1983-1988年のそれら25篇(53-77) (但し、実際には22篇) が集められている。ただ、前回もそうであったが、この論文集の特徴は以前に出版されたものをただ単に集めて出版するのではなく、すべて活字を組み直して全巻に統一を保っている点にある。従って、初出論文を写真に撮って集録した多くのこの種の企画が、それぞれの論文の初出雑誌の体裁、規格によって大小まちまちであるとは異なって、K. R. Norman のこの論文集は全巻同一の体裁を保ち、通しページが上方にふられている。ただ、組み換えによって当然生ずべき初出原著のページ数との異同は原著ページ数を鋭角括弧によって各論文の中に示す事によって解決されている。従って原著を参照し、又それより引用しようとする者はこの鋭角括弧のページ数によればよいように特別の配慮がなされている。のみならず、注はすべて今回脚注となった。配列の順序は総て発表の年代を追っているから、分野別にはなっていない。この種の配列には長所もあって著者の関心の歴史的推移を知る手掛かりともなるが、他面

彼は記念論文集執筆の際に献呈さるべき学者の専門、関心に合わせて執筆しているから、必ずしもそうとも限らない。両書とも巻末には語彙索引が添付されて利用者の便に供している。

第二巻は Middle Indo-Aryan Studies の題名を冠するもの3篇(33, 40, 41)の他、阿育王碑文に関するもの3篇(35, 50, 52)、ジャイナ教に関するもの1篇を除いて仏典、仏教の概念に関するものが多い。その中でも *The Language in which the Buddha taught* (38), *The Dialects in which the Buddha preached* (42) は仏陀の言語に関するが、仏教における『我』の問題 (*Attā in the Alagaddūpama-sutta*) (48), 『神』の問題 (*The Buddha's view of devas*) (31), (*Devas and Adhivēvas in Buddhism*) (44), 『四聖諦』 (*The four noble truths*) (49), 『独覚』 (*Pratyeka-Buddha in Buddhism and Jainism*) (51) を扱ったものは広く仏教学者の興味をひくところであろう。他に *Vessantara-jātaka* (45), *Dhammapada* (46) の語学的問題を論じたものがある。

第三巻は他の巻に於けると異なり、題名のみ出して実際には論文を載せて居ない例が三つある (*not included*)。それらは59, 69, 77で、この中には1986年来日時に講演したものの2篇が含まれている。恐らく内容の通俗性の故に削除したものであろう。阿育王碑文関係5篇 (64, 67, 70, 75, 76), Pali 語彙研究3篇 (*Pali Lexicographical Studies*) (60, 66, 74), *Uttarādhyāyana-sutta* に関するもの2篇 (53, 73), 又これまで JOI に執筆していた Middle Indo-Aryan Studies は1篇のみ (XVI) (54) となっている。概して Pali 研究が増加していて、*Metre* に関するもの (57), 外連声に関するもの (71), 涅槃の同義語としての *sabbato-pabha* (*An epithet of Nibbāna*) (68) 転輪聖王の九宝 (55) に関する研究の他、PTS の活動 (62), Pali 語の翻訳問題 (58), 印欧語に於ける位置 (72), Pali 伝承の価値 (56) Pali 注釈家、文典家の上座部伝承に及ぼした影響 (61) 等がある。

(2) *Collected articles of L. A. Schwarzschild on Indo-Aryan 1953-1979*, compiled by Royce Wiles, Faculty of Asian Studies Monographs: New Series No. 17, Faculty of Asian Studies, Australian National University 1991. pp. xii+223.

Oxford の碩学 Thomas Burrow の高弟として若くして令名を馳せていた L. A. Schwarzschild の中期インド・アリアン語に関する研究26篇が一書となって上梓された。同女史は物理学者 Hercus (故人) と結婚してオーストラリアに移り、1973年以來久しくキャンベラの豪州国立大学において J. W. de Jong の主宰する South Asian and Buddhist Studies 学科で教鞭を執っていたが、1991年停年退官した。退官を機に同女史の若き日の専門分野 Prakrit 語研究の優れた論文を同僚、友人、門弟集って一書としたことは女史の学徳の致す所であるが、諸種の学術雑誌、記念論集に散在していた有名な論文が一書に纏められた事は今後この方面の研究者に便宜を供する事測り知れない。因みに同女史は豪州移住後、原住民 (Aborigines) の言語に少なからぬ関心を示し、この分野では L. A. Hercus の名の下に数多くの論文、著書を著して多大の貢献をなした。彼地であって同女史はこの分野の指導的地位に在り、むしろその方面の専門家として有名である。退官を記念して原住民言語の研究者が集い、別途記念論文集を用意していると聞く。

本書は K. R. Norman の序文に始まり、同女史が1951年より1985年に亘って中期インド・アリアン語に関して発表した研究、書評等約70点を列挙した著述目録の後、本文に入る。巻末は二つの索引、Grammatical Index (Colin Mayrhofer), と Index of Old, Middle and New Indo-Aryan Words (Royce Wiles) によって締め括られている。

26の論文は広く中期インド・アリアン語の音韻論、形態論、構文論の諸相を扱っている。先ず音韻論 (Phonology) に関しては特殊な音変化(23)、子音間の母音交替現象(18)、語頭反転音(24)があり、形態論 (Morphology) に関するものとして中性複数語尾(26)、女性名詞曲用(6)、処格形(25)が挙げられるが、中でも Prakrit の構文論 (syntax) に関するものが目を惹く。それらの中には未来時制(1)、命令法(20)、絶対法(5)、不定法(3)、序数詞(17)、疑問詞(22)、接続詞(21)、副詞(4, 8)、

所有形容詞(2)、後置詞(12)、前接辞 vo-(19)、不転詞 je (14)、過去分詞(9)等を数え得るが、『全』を示す語、『突然』を示す語を論じる2篇(13, 15)、特殊語彙 ghummira, gholira (16)、thakka (9)を論じるもの、Hindi 語 nahin (11)の歴史を論じるもの等がある。

周知の通り Prakrit 研究者には R. Pischell, J. Bloch, F. Edgerton, Th. Burrow 等類稀な言語学者を数えるが、L. A. Schwarzschild はその伝統の上に立って、その重要な問題の幾つかを明快に論じた。その守備範囲は印欧語よりヴェーダ語、サンスクリット語を通して近代インド・アリアン語に及んでいるから、本書は Prakrit 研究者のみならず、現代インド語研究者にも有益である。更にその所論は広く言語史一般に興味を有する者にも啓発する所少なくないであろう。

(3) *Sanskrit Studies of M. B. Emeneau, Selected Papers*, edited by B. A. van Nooten, Occasional Paper Series 13, Center for South and Southeast Asia Studies, University of California, Berkeley 1988 ix pp. 1-213.

Sanskrit 語学文学、さらに広くはインド研究者が何らかの形で座右の書として参照してきた A Union List of Printed Texts and Translations in American Libraries (American Oriental Series 7 1935, Kraus Reprint 1967)の著者として知られ、又戦後はドラヴィダ研究に従事して Th. Burrow と共に Dravidian Etymological Dictionary (Oxford, 1961, 1984)の金字塔を築いた現在北米最長老の碩学として仰がれる M. B. Emeneau 博士の梵語に関する珠玉の論文22篇と書評2篇 (Triṣaṣṭīśālākāpuruṣacaritra by Hemacandra vol. V, books VIII and IX, vol. VI, book X translated by Helen M. Johnson, M. Mayrhofer, Kurzgefasstes etymologisches Wörterbuch des Altindischen)が一書となって公刊された。全巻同一の体裁を具え、著者自ら選び、増補し且つ校正したこの論文集は碩学の自信の傑作ばかりで、永くその業績を記念するものである。二部に分かれ一は文学・文献学 (literary and philological)、二は言語学 (linguistic) を中心とし、巻末は三種の索引に締め括られ本書の利用価値を高めている。この企画を推進した編者 van Nooten 博士に深甚の謝意を表するにやぶさかでないが、後学の者は F. Edgerton の高弟として

学界に偉大な足跡を残した M. B. Emeneau 博士の全作品の再刊を願わずにおれない。

第一部は13の論文を集めている。所謂 *realia* 関係のもの (*sinduvāra tree, strangling figs, composite bow, signed verses, nāga-pāśa, etc., valkala*) と梵文学の特定句の文献学的研究を中心とする。例えば(1)と(2)は広く梵文原典から *sinduvāra, śephalikā, aśvattha (nyagrodha)* への言及を可能な限り蒐集して植物を比定したものであり、(4)はインドに弓 (*dhanus, cāpa*) が何時、何処から伝えられ、それがいかなる構造を有していたか、*dhanus (ŚB. 5. 3. 1. 11, Jātaka 181, 522 etc.), śārṅga, śārṅgin (from śrṅga 角)* の出典箇所を精査し、*Bharhut, Sanchi, Ajanta* の彫刻をも考証している。(5) *Signed verse* とは詩人が自作の詩の中に自分の名前を歌い込んでいるものを言い、梵文学に在って必ずしも稀でないが、それらの幾つかが論じられ、*Bāna* の *Caṇḍīśataka 24, 30* を新たにそれと断定する。(7) *nāga-pāśa, nāga-bandha* は敵人の足に絡ませる神秘的武器 (*MBh. and Hemacandra*)、建築学の術語、詩学 (*citra-bandha*) に亘り、この語の用例を検討したものである。ともに語彙研究がいかに在るべきかを教える典型的な論文と称しうる。(8)は *Kālidāsa* の *Śakuntalā* が叙事詩に拠っていることを証明したもので、その他 *Naiṣadha-carita* 関連2篇(3, 6)がある。(11) *Bhagavad-gītā notes* は恐らくは *R. K. Sharma* の学位論文 *Elements of Poetry in the Mahābhārata* (1964)の指導線上に位置すると思われ、ギーター第6巻の文体論的研究である。*Kāvya* とは異なる *Epic* の style を *chiasmus, concatenation, repetition (esp. ātman)* の視点より分析し、所謂 *formula* の原型を想定している。他に *madhyastha* と *udāsīna (remote neutral)* の相違、3.41の *prajahiḥy (hā-), prajahi hy (han-)* の分解可能性を示唆している。(12) *Central Asiatic versions of the Vetālapañcaviṃśati* は碩学の若き日の学位論文 *Jambhaladatta's version of the Vetālapañcaviṃśati 1934* の線上に位置するもので、仏教徒の伝えた中央アジア、カルムイク語その他に見える屍鬼25話序論部の研究で、『変身腕くらべ』の物語が論じられている。(13) *Was there cross-cousin marriage among the Śākyas?* は仏陀と提婆の所謂 *cross-cousin* の関係 (*Śākya and Koliya*) を論じたもので、関係文献

を検討し、それら全てが南インド、シンハラの伝える後期のものである事を確認して *A. M. Hocart* の説を斥けている。

第二部『言語学』は『古インド・アリヤン語の方言』に始まり、*daṇḍa, dośā, dhosaka, tara-vaṭa, damana, kuḍmala* 及び固有名詞 *Sāyaṇa (svāmin+anna)* の語源、擬声音、*bhogin* の語の意味の変遷、それに梵語構文論上の有名な論文、*kila, khalu, nūnam* が収録されている。博士の語源研究を特徴づけているものはヴェーダ文献、叙事詩、欽定詩、叙情詩にわたる広汎なインド・アリヤン語の学識を背景にドラヴィダ語の該博な知識を駆使しての所論で、余人の追随を許さぬものがある。彼が *M. Mayrhofer* の語源辞書を長文にわたって書評しているのはこの見識と自信に拠っている。

(4) *Devotion Divine, Bhakti traditions from the regions of India, Studies in Honour of Charlotte Vaudeville*, edited by *Diana L. Eck* and *Françoise Mallison*, *Groningen Oriental Studies VIII*, *Egbert Forsten / Groningen, École française d'Extrême-orient, Paris 1991*. pp. xvii+298.

Kabir の研究者として高名なこの学者のために14人の研究分野を同じくする同僚、友人が論文を献呈している。二人の編者の序文に始まり、1949年以来的同女史の著述目録掲載の後本文に入り、巻末は10ページ余りの索引によって締め括られている。*Hans Bakker, Peter Gaeffke, F. Hardy, R. S. McGregor* 等梵語梵文学研究者に親しい名前も見えるが、公平等分に紹介する事は筆者の能力を超えるから、以下に目次のみ列挙するに留める。

Ali S. Asani: The Ginān Literature of the Ismailis of Indo-Pakistan.

Hans Bakker: The Footprints of the Lord.

H. C. Bhayani and Hasu Yagnik: Kṛṣṇa in the Gujarati Folk-song Tradition.

Diana L. Eck: Following Rāma, worshipping Śiva.

Alan W. Entwistle: The Cult of Krishna-Gopāl as a Version of Pastoral.

Anne Feldhaus: Paiṭhan and the Nāgas.

Peter Gaeffke: Muslim Marriage Rites in the 17th and the 19th Century.

- Friehelm Hardy, : Tirup Pāṇ-Ālvār, The untouchable who rode Piggy-back on the Brahmin.
- John Stratton Hawley: Feast for Mount Govardhan.
- R. S. McGregor: An Early Hindi (Brajbhāṣā) Version of the Rāma Story.
- Françoise Mallison: Lorsque Raṇachoḍarāya quitte Dwarkapour Dakor.
- Frédérique Apffel Marglin and Purna Chandra Mishra: Death and Regeneration: Brahmin and Non-Brahmin Narratives.
- Gunther D. Sontheimer: Bhakti in the Khaṇḍobā Cult.
- Monika Thiel-Horstmann: On the Dual Identity of Nāgās.
- S. G. Tulpule: The Dog as a Symbol of Bhakti.

(5) *Understanding Mantras*, Harvey P. Alper, Editor, Suny Series of Religious Studies, State University of New York Press, Albany 1989, pp. 1-530.

漢訳仏典で『真言』と訳されて本邦に親しく、またインドの宗教史に重要な役割を演じたマントラに関してはこれまで J. Gonda の論文 (The Indian Mantra, *Oriens* 16, pp. 244-97, 1963) が唯一の纏まった研究であった。それは古くヴェーダに淵源するが、その最も重要な発展はタントラ文献に見られる。

インド学の諸分野に於いて戦後最も顕著な発展を遂げたものにタントラ研究がある。戦前にはわずかに Sir John George Woodroffe の発表したものがあるのみで、しかも彼は Arthur Avalon という匿名に於いて出版している。それは多分に内容の秘義と実践の卑俗性によっていた。戦後、情報は多くなり、現地調査も飛躍的に進んでタントラ研究は面目を一新した。なかんずく1960年代、J. Filliozat がボンヂェリにフランス印度学研究所を設立するに及んで、タントラ研究はさらに学問的基盤を得た。優れた概説書も既に二つ公刊されている (S. Gupta, D. J. Hoens, T. Goudriaan, *Hindu Tantrism*, *Handbuch der Orientalistik*, Leiden 1979, T. Goudriaan and S. Gupta, *Hindu Tantric and Śākta Literature*, *A History of Indian Literature*, Wiesbaden 1981)。この時期に先年物故した Harvey P. Alper は

10人の学者を糾合してタントラに特徴的なマントラに関して500ページを越す大著を世に送った。執筆者の中には戦後のタントラ研究を推進した立役者 A. Padoux, G. Oberhammer, S. Gupta, それにプラナーナ研究の権威 L. Rocher が含まれ、本書の権威をいやが上にも高めている。

(1) E. B. Findly, "Mantra Kavi-śāstr": マントラ (Formel) に特殊な力ありと信じられる所以はそれが真実 (satya, ṛta) に裏打ちされ、amati を極度に嫌う真剣な詩人 (Kavi) の心 (hr̥d) の発露である故である。著者はなかんずく Brahman の概念との関連に於いてヴェーダのマントラを論じている。

(2) F. Staal, "Vedic Mantras": マントラの有意義性については古く Nirukta 1. 15 に Kautsa の説が紹介され、Mīmāṃsā-sūtra 1. 2. 31-39 にも言及される所であるが、Staal は有意義性の濃淡6のマントラを順次例示してそれらを解説しつつ、マントラの性格を論ずる。無意義の極に位する Stobha, bija の類に言語以前の人間の営みの跡を見ようとする。

(3) W. T. Wheelock, "The Mantra in Vedic and Tantric Ritual": ヴェーダの祭式とタントラの儀軌にみえるマントラによる聖別、聖化、神人交流の実態を、前者に新満月祭、後者にヒンズウ教の nitya pūjā の例を取って、両者を比較し、両者の間の異同、連続と相違の問題を論ずる。

(4) K. G. Zysk, "Mantra in Āyurveda": インドの医学には Atharvaveda の呪術に由来する宗教的、魔法的なものと、経験的、科学的なものの二系統がある。マントラは前者、Āyurveda は後者に属するが、後者の中に前者の要素がどの程度残っているか、腫れ物、毒消し、発狂、発熱等にわたって検討する。

(5) John Taber "Are Mantras Speech Act? The Mīmāṃsā Point of View": John R. Searle の Speech Acts 理論に基いて Mīmāṃsā のマントラ観を解析する。ここにマントラの有意義性を擁護する Mīmāṃsaka の主張が紹介、分析されるのみならず、彼らの言語観察に現代的意味を見ようとする。

(6) H. Coward, "The Meaning and Power of Mantras in Bhartṛhari's Vākyapadiya": 言語哲学の書に於いてマントラがいかに考えられていたかを考究する。Bhartṛhari によれば、マントラは本来有意義であり、無知を払い、真理をあき

らめ、解脱を可能ならしめる力を蔵するものと考
えられていた。śabda-brahman, 言語の三段階、
さらに Yoga-sūtra 及び bhāṣya (1. 24-29, 42)
との関連がこの間に論じられる。

(7) L. Rocher, “Mantras in the Śivapurāṇa”:
7 Saṃhitā より成る Śivapurāṇa の中よりマン
トラ関係箇所を網羅して精査し、その性格特徴を
論じた極めて手堅い文献学的研究成果である。
praṇava 分析, Śiva-mantra の効用 (変成男子、
階級特進等) を論じた後、ヴェーダ起源のマン
トラ約20を紹介して、タントラ系 bija-mantra の
類が寧ろ従属的である事、ヴェーダ起源のもの
の中でも Yajurveda 系統のものが顕著であると結
論する。

(8) G. Oberhammer, “The Use of Mantra in
Yogic Meditation: The Testimony of the Pā-
śupata”: Pāśupata 典籍に見える二種の瞑想、即
ち低次のそれ (dhyāna) と高次のそれ (dhāraṇā)
を可能ならしめるマントラ、即ち aghora [3] と
tatpuruṣa [4], 及び om, praṇava を検討し、後
者に超越者(神)の神秘的現前, 神人の感応同交,
更に神による人間の救済即ち解脱を可能ならしめ
るものとしている。

(9) S. Gupta, “The Pāñcarātra Attitude to Man-
tra”: ヴィシヌ教の一派、パンチャラートラの
宇宙創造説, vyūha 論, 言葉の四段階を絡め、極
めて広汎な知識を背景にこの派の特徴 (conserva-
tism and devotionism, prapatti) を論じ、そ
の中にマントラを位置づける。マントラは神の本
質をあきらめ、その恩寵を保証しつつ、信者と神
を結び付けた。神は献身 (prapatti, upāsana) す
る信者を救う為に彼の音声的顕現を創造したとす
る。

(10) H. P. Alper, “The Cosmos as Śiva’s Lan-
guage-Game”: カシュミール シヴァ教の集大成
者 Kṣemarāja の Śivasūtravimarsīṇī に見える
マントラを研究しつつ、L. Wittgenstein, J. Hui-
zinga 等、近代西洋の哲学者、社会人類学者の視
点を入れて解釈し、その現代的意味を考察する。

巻末は A. Padoux の結論と H. P. Alper の文
献目録によって締め括られている。Kashmiri
Śaivism の権威 A. Padoux は上述10人の学者の
所論を概観しながら、マントラの本質を説き、問
題点を明らかにし、今後に残された問題を整理し
て提示している。当代屈指の Hinduism 研究者
の説く所は傾聴に値し、マントラ研究の現状と将

来の展望を知るに最高の指針を提供している。因
みに彼の功績を記念して Utrecht の T. Goudri-
aan は記念論文集を企画し、近時同じ SUNY より
出版された。今一つは A Working Bibliogra-
phy for the Study of Mantra と題してその量
約120ページに達している (pp. 327-443)。インド
思想史、宗教史にわたって重要分野を設定し、そ
の許に研究史を網羅しようとしたこの試みは上の
Padoux の論考と共に、本書の圧巻でマントラ研
究に極めて重要な貢献と称し得る。巻末は Bib-
liography (444-530) となっているが、mantra と
親近関係にある stotra に関するものが欠如し
(例えば、Hoykaas, *Stuti and Stava*, Bühnem-
ann, *Rāmarakṣastotra*) ているのは遺憾である。
また仏教のマントラについては本書に殆ど触れる
所がない。又、巻末に主要語彙の索引が添付され
ていれば、更に本書の利用価値を高めたと思われ
る。

しかしながら、本書は最も纏まった最新のマン
トラ研究の大冊である事に疑いをいれず、今後い
やしくもマントラを口にする者は本書を無視して
通過する事は出来ない。又各論文はそれぞれヒン
ズー教個別研究に有益な視点を提供している。

(6) *Moral Dilemmas in the Mahābhārata*,
edited by B. K. Matilal, Indian Institute of
Advanced Study, Shimla, in association with
Matilal Banarsidass, Delhi Varanasi, Patna,
1989, pp. xiv, 1-156.

Bhagavadgītā の冒頭に語られるアルジュナ王
子の煩悶—武士が親族を殺してまで戦いに勝利す
べきか—に象徴される道徳的相克 (moral dilem-
mas) に類するものを、先年物故した Oxford の
B. K. Matilal が12人のインド人学者を糾合して
叙事詩より集め一書に纏めた。インドには古くヴ
ェーダの天則 ṛta の系統を引く宇宙的、全人類
的 dharma (śāntana-dharma, sādharma-dharma
〔不殺生その他〕) と varṇa-āśrama その他社会制
度の変化、複雑化と共に発達した個別の dharma
(kula-dharma, rāja-dharma, kṣatra-dharma,
āpad-dharma 等) があり、両者は時に相矛盾し、
相克する。常識的にも馬鹿『正直』の悪、『嘘も方
便』の効用は経験の事実で、dharma が時と所に
応じて融通性を帯びる事が知られ、それは dhar-
ma-sūkṣmatva の概念となる。13の論文は種々
様々で、必ずしも総てが Moral Dilemmas の間

題を扱っているとは称し難く、中には哲学的随想の域を出ないものもないではないが、問題の提起は極めて新鮮かつ有益であると称し得る。以下に簡単に内容を紹介し問題点を明らかにするであろう。

- (1) Arjuna は神秘の愛弓 Gāṇḍīva を非難する者に対して必殺の誓いを立てていたが、非難者は囚らずも兄 Yudhiṣṭhira となった (MBh. 8. 49)。彼は敢えて誓いを破り、兄の命を尊しとした。有名な Kauśika 仙の物語もここに紹介されている (B. K. Matilal)。
- (2) Duryodhana の Kṛṣṇa 批判, Gāndhāri の Bhīmasena 批判を中心に武士道に悖って勝利を収めた実例 (kūṣṭha-yuddha) を挙げ、戦勝の矛盾、相剋を論ずる (T. S. Rukmani)。
- (3) 数有る叙事詩の英雄の中から、終始道徳的に高潔であった武士 (Bhīṣma, Karṇa) と奸計を事として悔いない者 (Kṛṣṇa) の両極に位する者達の素描が試みられている (S. P. Dubey)。
- (4) 叙事詩の道徳的相剋の問題を最も簡単に手際よくまとめあげている (K. K. Raja)。
- (5) 叙事詩が百科全書の性格を帯び、法典、実利論、性典、解脱論書と自らを称しているから、その中に矛盾を蔵するのは当然の勢いであった。所謂 Trivarga の優劣を論じつつ、叙事詩内のそれらの間の矛盾、相剋を明らかにする (Y. Krishan)。
- (6) Pāṇḍava 五王子の Draupadī との結婚に見える一妻多夫制は Kaurava, Pāncāla には認められぬ制度であった。その相剋を明示して一妻多夫制を許容した Pāṇḍava 一族がヒマラヤ出身であると推測する (A. N. Jani)。
- (7) 五王子と百王子の間に立って、仲裁、大使の役目を帯びながら、Kṛṣṇa が果たして戦争回避の意図を有していたか否か、叙事詩第五巻を中心に論ずる (Amiya Dev)。
- (8) Vicitravīrya の二人の寡婦 (Ambikā, Ambārikā) を姑 Satyavatī が無理矢理 Vyāsa に嫁がせて、三人の男子 (Dhṛtarāṣṭra, Pāṇḍu, Vidura) を得る、所謂 niyoga の制度が社会通念上果たして真に許されていたものか否かを論ずる (S. Kantawala)。
- (9)-(11) 既述の Bhagavadgītā 冒頭の問題を扱う (P. D. Santina, S. P. Kashap, M. M. Agrawal)。
- (12) MBh. 14. 78 に見える勝者 Arjuna と敗者 (Jayadratha) の妻 (Duṣsalā) との対面を描いて、戦争の悲哀を物語る (E. R. Sreekrishna Sarma)。

(13) MBh. 2 に提起される Draupadī の質問、即ち賭に自分自身を賭けて敗れた夫 Yudhiṣṭhira が、既に自由を失った奴隷の身分でありながら妻 Draupadī を賭けた事の有効性が問われる。Bhīṣma, Vidura, Vikarṇa のそれぞれの立場からの意見が紹介されている (S. M. Kurkarni)。

既に述べた様に、13の論文総てが Moral Dilemmas の問題を扱ったとは称し難く、出典引用も杜撰かつ不正確なものもあるが(例えば p. 12 に紹介される狩人 Balāka の物語 [MBh. 8. 94] で彼を śabda-vedhin [Cf. R. 2. 57. 8] のように取るのは誤り。MBh. 8. 49. 36 d の *ghrāṇa-caṅṅsus* は盲目のものが、嗅覚を用いて目的物を探り当てる様を言い、それは Balāka よりは彼に殺された怪物を指している)、編者 B. K. Matilal の問題の提起は斬新で、古代インドの叙事詩の英雄達の内心の煩悶、苦悩の実態を描き出す事に成功している。